

ひと缶に込める復興への思い

学校法人近畿大学近畿大学附属中学校 1年 大川 さくら

私は、酒屋を営む祖母と一緒に暮らしています。

歴史をたどれば江戸時代から酒屋を営んでいたようですが、祖父が亡くなった今は、祖母は少しの配達と自動販売機のビールやお酒の販売で暮らしを立てています。6年前に私が祖母と一緒に暮らすようになってから、自動販売機にビール缶やお酒のビンを入れる作業を手伝うようになりました。

私にしたら、「お茶やジュースはおいしいけど、ビールってどんな味がするんやろう。お酒っておいしいの？」という気持ちで、ビールやお酒が売れる理由も分からず、そんな気持ちもあって、私のお手伝いもあまり身が入っていませんでした。その中で、祖母が、「なるべくお客さんのことを思って、安く値段を設定してあげてるんやで。」とか「ビールの値段が上がったから、自動販売機の値段をまた変えないとあかんわ。」というようなことをいつも話しているのが印象に残っています。

お酒を買うということは、消費税とまた違って、実は酒税という税金も含めて支払いをしているということです。祖母が話すビールの値段があがる、という話は、税金が上がるということを意味しています。消費税も上がったし、お店で何か食べたり飲んだりしても、持って帰るより税金が高いし、祖母が売値の値段に小さな努力をしても、どんどん税金が上がっていくのかと思うと、少し苦しい気持ちにもなっていました。

しかし、税金のことを祖母に詳しく聞くと、お酒の税金は国にとって、とても貴重な財源と言うことを教えてもらいました。10月に税金が上がる第3のビールについても、よく売れるんだと笑って教えてくれました。そして、この貴重な税金が多く国民から集められることによって、東日本大震災・熊本地震・西日本豪雨災害への復興資源として使われていることも同時に学びました。

私の父方の祖父母は、7月の熊本の豪雨で氾濫した球磨村の近くに住んでいて、とても怖い思いをしたと言っていました。そして芦北町の親戚の家では、1階部分が全て浸かってしまったと聞きました。

たった一人の力では、復興へのお手伝いはなかなかできませんが、税という形で資金を集めてもらって、大きな力・全体の力で親戚や日本全体の復興の手助けをしてもらいたいと思いました。新型コロナウイルスで今年は九州に行くこともできず、被害の片付けの力にもなることが出来ないことが本当は残念ですが、祖母と税金の話をして、祖母のお手伝いをすることで、商品を買ってもらい、それがずっとずっと先にある災害復興支援につながっているかもしれないと思うと、少し気持ちが楽になりました。

これからは、ひと缶ひと缶に思いを込め、必要としている人の力になっている、そう信じてお手伝いを続けていきたいと思っています。